



ふたはの桂

京都府大広報 **No.175** | 2015.3

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



特集 京都府立大学開学120周年を迎えるにあたって

CONTENTS

- | | | | | | | | |
|--------------|------|--------------|---------|------|-----------|---------|-----|
| 地域連携 | — 5 | 話題の研究 | — 6 | 国際交流 | — 7 | ニューフェイス | — 7 |
| 各学部・研究科の取り組み | 文学部 | — 8 | 公共政策学部 | — 8 | 生命環境科学研究科 | — 9 | |
| 受賞情報 | — 10 | 退職教員からのメッセージ | — 11~12 | | | | |

特集

京都府立大学開学120周年を迎えるにあたって

大還暦を迎える京都府立大学

京都府立大学120周年記念行事実行委員会委員長
浅井学

この4月で120周年

現在京都府立大学と呼ばれている本学は、1949年4月1日に、京都府立農林専門学校と京都府立女子専門学校という二つの専門学校を母体として、新制大学の西京大学として発足しました。その母体の一つ京都府立農林専門学校が、京都府簡易農学校として開設されたのは1895年4月です。それを本学の元々の創立とするなら、今年2015年4月で京都府立大学は創立120周年を迎えることになります。人間で言えば二度目の還暦、いわゆる「大還暦」ということになります。この機会にざっと本学の歴史を振り返ってみましょう。

京都府立大学の2つの源流

本学の源流の一つとなる京都府簡易農学校が開設されたのは、上で述べたように、1895年。場所は当時の愛宕郡大宮村で、現在修学旅行の見学先としても有名な大徳寺境内の塔頭を借り受けて授業を開始しました。京都府簡易農学校はその後、京都府農学校(1898年)、京都府立農学校(1901年)、京都府立農林学校(1904年)、京都府立京都農林学校(1923年)と名前を変え、京都府立高等農林学校へと昇格(1944年4月1日)、最終的に京都府立農林専門学校(1944年7月1日改称)となります。京都府立農林専門学校は、京都府立農林学校時代の1918年、現在の下鴨の地に校舎を移しました。

本学のもう一つの源流は1927年4月に開校した京都府立女子専門学校です。最初は京都府立第一高等女子学校(現鴨沂高等学校)の校舎の一部を間借りして授業を行っていました。京都府立女子専門学校は、その後1933年に京都市右京区桂(現西京区)に新校舎を建設し、そこに移転して、以後「桂女専」の名前で知られるようになります。

新制「西京大学」発足から「京都府立大学」へ

戦後の1947年、学校教育法が公布され、高等教育機関は基本的に4年生の「新制大学」に一本化されることになりました。そこで、京都府立農林専門学校と京都府立女子専門学校は、両者を母体として新制の総合大学を設置することにします。1949年新制大学として発足するにあたって当初考えられていた校名は「府立京都大学」でした。しかし、時の文部省(現文部科学省)から、国立の「京都大学」と紛らわ

しくないよう名称を訂正せよという指示が出て、「西京大学」という名前での再申請を余儀なくさせられました(このあたりの経緯については、京都コンサートホールを挟んで本学の北に位置する京都府立総合資料館の資料で実際に確認することができます)。この場合の「西京」とは、東の都「東京」に対しての西の都、つまり京都を指しています。名称としては、東の都にある東京大学へのカウンターパート(相対物)になるような名前だったわけです。

しかしながら、「西京大学」という名前は、学生を含む大学構成員や同窓生からはあまり芳しい評判を得ていなかったようです。また、この名前では公立、私立の区別、あるいは設置者が判然としないこと、「西京」という地名は当時の(現在も?)慣行地名には存在せず、所在地が判明しがたいこと、また、「西京」という名称が京都市の西部つまり「西ノ京」と混同されやすいこと、等々の理由で、西京大学としての創立10周年の記念行事の一つとして、名称を変更することになりました。こうして1959年5月1日より本学の名称が現在の「京都府立大学」になりました。

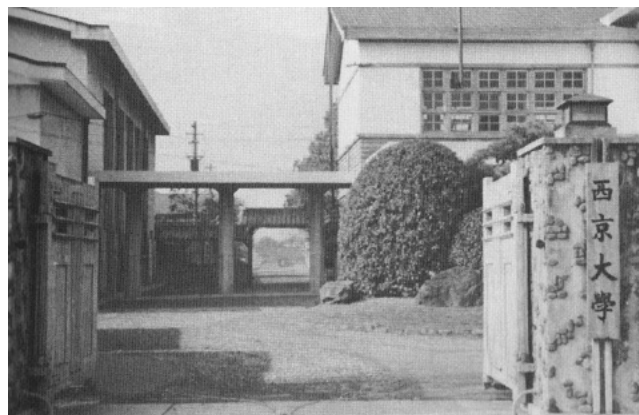


写真1：西京大学正門



写真2：西京大学(京都府立大学)創立十周年

■その後の京都府立大学、これからの京都府立大学

京都府立大学になって以降、名称の変更はありませんでしたが、キャンパスの移転や様々な組織の変遷がありました。細かい内容を挙げていけばきりがないので、詳しくはキャンパスガイドや『京都府立大学概要』、あるいは本学ホームページの「大学の沿革」の「年表」にゆずりますが、1962年に、それまで右京区桂と左京区下鴨の二つに分かれていたキャンパスが下鴨の現在地に統合されたこと、1995年に開学100周年を迎えたこと、1998年に惜しまれながら女子短期大学部が閉学になったこと、2008年に大学の法人化が行われ、京都府立大学ならびに京都府立医科大学を設置・運営する京都府公立大学法人が設立されたこと、それとともに学部は、現在に至る文学部、公共政策学部、生命環境学部の3学部体制に改組されたことなどは、この間の大きな出来事として特筆に値するでしょう。

また、本年度は、本学と京都府立医科大学と京都工芸繊維大学の学生が共に教養教育科目を学ぶ「稲盛記念会館」が完成し、3大学の教養共同化が本格的にスタートしました。そして、2016年には文学部と附属図書館と京都府立総合資料館が入り、国際京都学センターが併設される合築棟が完成します。さらに精華キャンパスの整備や和食文化の高等教育を行う新組織の設置も控えています。120周年を迎える京都府立大学は、今また姿を変え、大きく飛躍しようとしています。



教養教育共同化施設(稲盛記念会館)

■120周年記念行事について

冒頭にも書きましたが、120周年は人間で言えば「大還暦」という大きな節目にあたります。100周年の時のような大々的なことはできませんが、府大関係者皆で盛り上がるような記念行事や企画を現在準備しているところです。内容はおよそ以下のような感じです。

まず、創立120周年のシンボルとなる記念ロゴマークを作成したいと考えています。そして、そのロゴマーク入りの各種120周年記念ロゴグッズの製作・販売・配布等をする予定です(限定品のレア物とお考えください)。メインイベントとなる式典、記念レセプション等は流木祭(なからぎさい)初日の11月14日(土)に行う予定です。式典後の記念イベントはこの原稿を書いている段階ではまだ詳細が決まっていますが、大還暦を祝う何か特別なものにできればと考えています。流木祭の時には、他にもホームカミング企画として、「映像と写真で振り返る府大120年」(仮称)や現役生や同窓生等の交流空間BAR「たむろば」強化版等を企画しています。また、120周年を祝う特別な装飾も考えています。さらに、この機会に記念企画の一つとして府大の公式マスコットキャラクターを制定したいと考えています。

いろいろ課題もありますが、現役学生・教職員、同窓会、後援会、校友会等、府大関係者全員が心をつなげて、府大の未来に希望をつなぐようなイベントにしたいと思っております。ご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

(参考文献:京都府立大学百年誌編纂委員会編『京都府立大学百年誌』(1995年)、写真1,2は『京都府立大学百年誌』より)

下鴨キャンパスの文化遺産

文学部 歴史学科 上杉和央 准教授

京都府立大学の前身の1つ、京都府簡易農学校は明治28年(1895)に開学した。この時点からかぞえて今年には120周年の節目となる。当初は何度か移転を経験しているが、大正7年(1918)に下鴨にキャンパスが移ってきた。下鴨に腰を据えてからもすでに100年近い歴史が刻まれていることになる。

本キャンパスは当初、大典記念京都博覧会会場予定地として府が購入した約10万坪の土地の一部で、その後、植物園へと構想が変化するなかで、その一部を農林学校用地にあてたことが始まりである。その後、農林学校から遅れること6年、大正13年に植物園が開園した。

この頃、周囲はのどかな田園風景が広がっていたが、昭和になると土地区画整理事業が盛んとなり、住宅開発が進んでいくことになる。大学周辺でもっとも早いのは現在の下鴨中通から東側一帯の洛北土地区画整理組合による事業である。昭和2年(1927)から昭和5年までに区画整理がなされ、昭和9年に完成した。大学近隣の菟兒童公園には、この区画整理事業の完成を記念した石碑が建っている。

昭和9年は大学でも大きな出来事があった。それは9月21日に襲来した室戸台風であり、「本館・講堂が倒壊、教室・道場・寄宿舎など多大な損害」(『京都府立大学百年誌』)を受けたようである。台風により倒壊した本館の復興は、昭和11年になってからであり、立派な姿をした真新しい本館の写真が残されている(写真1)。

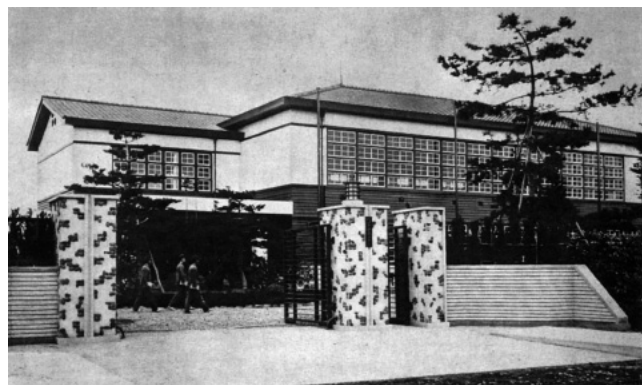


写真1 昭和11年新築の本館(『百年誌』より)

残念ながら、この建物は現存していないのだが、府立大学に学んだ者であれば、この建物が現在の合同講義棟のあたりにあったことがすぐにわかるだろう。というのも、この写真に映る施設のうち、正門は今なお活躍中だからである。この正門は80年弱にわたって、府立大生をみつめてきた大事な文化遺産である。

ただし、下鴨キャンパスができた当初から、中通沿いに「正門」があったわけではない。大正11年測図(昭和4年再版)の京都市都市計画図(歴史学科蔵)をみると、当時の構内は南北を軸として校舎が並んでいた(図1)。そしてこの頃の正門は東側ではなく、南側の道に対して設置されてい

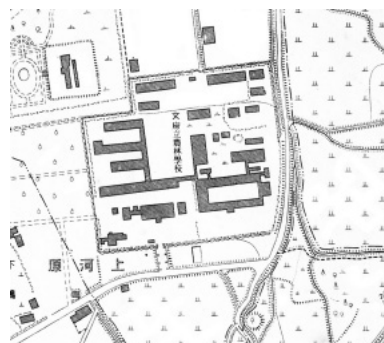


図1 大正11年都市計画図「上賀茂」縮尺はかえてある。

た。『京都府立大学百年誌』に載る当時の写真を見ても、本館が南を向けて建てられており、その前が正門となっていたことが分かる。

現在、大学の南側にある東西路は一方通行で、往来の少ない道という印象しかない。しかし、当時は植物園や農林学校の正門に通じる重要な道として位置づけられていた。実際、昭和3年に京都市内で初の市バス路線が走った際、その路線は出町柳～植物園間であり、大学南側の道にも「農林学校前」と「運動場前」というバス停が設けられていた。あの道にバスが、と思うかもしれないが、よく見ると一方通行にしては広い通りである。

南側に設けられていた「正門」の位置はどこだったのだろうか。今の南門付近は当初はキャンパス外であり、候補から外れる。しかし、都市計画図や京都市明細図(京都府立総合資料館蔵)と構内の現状を比較すると、その痕跡が明瞭に残されていることが分かった。

2号館と3号館の間を南にいくと「京都府立大学演習林本部」と記された木柱がある。その横はスロープとなっていて、そこを降りると6号館の東側のスペースである。このスペースこそ、南側の道から正門につながるエントランス部分であった。正門はスロープ付近(ごみ収集所横)ということになるだろう。実際、当時の写真をみても、正門までのエントランスは緩やかな坂になっている。

空間地の南側は先に触れた道路との境界だが、周囲が生垣なのに対して、この部分はフェンス扉となっている(写真2)。この場所が正門であったことの記憶をよみがえらせる装置と呼ぶには貧弱であるが、ちょっとした施設にも歴史があることを実感できる場所である。



写真2 南側が「正門」だった名残?

トピックス

地域連携

京都市産業技術研究所との連携・協力に関する包括協定締結記念シンポジウム 開催

地方独立行政法人京都市産業技術研究所との連携・協力の取り組みを今後一層推進するため、平成26年10月28日に連携・協力に関する包括協定を締結し、12月8日には包括協定締結を記念したシンポジウムを、133人の参加を得て、京都市産業技術研究所で開催しました。

開会にあたり、京都市産業技術研究所の西本理事長から、京都市の組織であった京都市産業技術研究所と京都府立の大学が連携することに大きな意義があり、大学のシーズを京都市産業技術研究所で地域に橋渡しして産業界に貢献していきたいと挨拶されました。また、築山学長からは、本学が初めて工業系の公設試験研究所と協定を締結するものであり、これまでの連携をさらに深め、学の研究成果が産業へとつながって、京都のものづくり企業の活性化に資することを期待していると挨拶しました。

シンポジウムでは、阿闍梨餅本舗 京菓子司 満月の常務取締役 中嶋哲夫氏から京都を代表する和菓子の一つ「阿闍梨餅」に関する秘話について特別講演を行っていただき、続いて、今後、京都市産業技術研究所と具体的に進めていく

「食の安心・安全な環境の構築」「京都産漆（丹波漆）の再興」「京都産（酒米・酒母）の日本酒の開発」の取り組みについて、シャープマニュファクチャリングシステム株式会社の森田健一氏や京都市産業技術研究所の研究員及び本学の教員により講演が行われました。森田氏からは「食の安心・安全な環境の構築」に関する講演のなかで、今回の包括協定及び産学公連携の取組により、食品に含まれる超微量の危険な微生物を迅速、簡便に検出できる分析器を提供できる可能性が見いだせるとの意見をいただきました。

シンポジウムは、多様なテーマで3時間以上にわたり開催されましたが、多くの方々が最後まで熱心に聴講いただいたところであり、京都市産業技術研究所との連携・協力への期待の大きさが実感されました。



シンポジウムの様子

地域連携

久御山町と連携協力包括協定を締結

久御山町との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成27年3月9日に連携協力に係る包括協定を締結しました。久御山町は、京都、大阪間の大都市近郊に位置し、工場や事業所の進出も多く、農業、商工業、住宅地の均衡のとれた町で、産業の発展のほか、安心・安全なまちづくり、福祉の充実と健康増進、教育の推進など積極的に取り組んでいます。一方、本学は、京都府の大学、府民の大学として、地域貢献、地域振興を大学の理念の一つに据えて、教育・研究活動を行っています。久御山町と本学は、これまでから、久御山町いきがい大学への講師派遣や、町の委員会委員を本学教員が務めるなどにより、連携してきましたが、本年度は、観光振興、まちづくりを推進するための新たな連携事業にも取り組んでいます。本学は、この連携協力包括協定を結ぶことによって、より幅広い分野で久御山町の課題に対応するとともに、地域の更なる発展に貢献していきたいと考えています。

包括協定では、今後、次の事項について連携協力をさらに進めていくこととしています。

- ①産業振興・まちづくりの推進
- ②住民参画・協働の推進
- ③健康・福祉の増進
- ④文化教育の振興
- ⑤人材育成
- ⑥健全な行政の推進 等



握手する信貴久御山町長(右)と築山学長(調印式)

連携協力包括協定の締結にあたり、信貴康孝久御山町長からメッセージをいただきましたので、御紹介します。

連携協力包括協定の締結にあたって

久御山町長 信貴 康孝



久御山町と京都府立大学は、これまで健康増進に関するセミナーの共催や、事業評価を行う公開事業診断に府立大学の先生にご参加いただくなど、様々な連携を行っており、本年度も新たな共同事業として、観光振興とまちづくりの観点からのガイドマップづくりに取り組んでいるところであります。

府立大学では、地域貢献、地域振興を大学の理念の一つとして教育・研究活動を展開され、本町地域の発展に今後も幅広い分野で貢献したいとの積極的な意向を示していただいております。

本町は昨年、町制施行60周年を迎え、府立大学におかれましては、今年創立120周年を迎えられます。

新たな時代を迎えるなか、今回の連携協力包括協定により、これまで以上に密接な協力体制を構築し、魅力と活力に満ちたまちづくりを進めてまいりたいと考えております。

トピックス

話題の研究

「岡崎どこいこトコトコ街図」^{ガイド}の刊行、AR作成について

文学部 歴史学科 文化遺産デザイン研修

文学部歴史学科には、文化遺産の活用を実践的に学ぶ文化遺産デザイン研修があり、毎年、数名の学生が参加しています。2014年度は京都市上賀茂地区での歴史遠足に加え、京都市岡崎地区の刊行ガイドマップ「岡崎どこいこトコトコ街図(ガイド)」の作成にも取り組みました。この事業は、京都岡崎魅力づくり推進協議会を中心に、京都府立大学歴史学科(文化遺産デザイン研修)、株式会社双林印刷社の3者による官学産連携によって完成したもので、私たちは岡崎の魅力を紹介するAR(拡張現実)の企画と実際の制作を担当しました。

ARの企画にあたっては、岡崎の歴史を振り返り、どのような観点から見れば岡崎の歴史的魅力が伝わるかについて、議論を重ねました。最終的には「始まりの場」「日常の場」「郊外の場」「ハレの場」という観点を採用することにし、それぞれに関する歴史や文化遺産について詳細な調査を行いました。そして、それぞれの観点に従って、1分程度の動画を作成し、ARにしました。

今回のARは、単なる動画ではありません。動画終了後、

京都岡崎魅力づくり推進協議会のウェブサイトへリンクされ、お薦めするモデルコースやスポット紹介にたどりつけるようになっています。そこでの紹介記事もまた、私たちが作成しました。このようにAR機能を用いることで「紙媒体の情報-ARによる動画情報-ウェブサイトによる詳細情報」が接続され、観光ニーズに幅広く応えることのできるガイドマップとなりました。

今回の事業では、歴史学科で学んださまざまな知識を社会に還元していくことの面白さと大変さを実践的に学びました。10万部発行されるというこのガイドマップ、みなさんぜひ手にとって、岡崎の魅力に触れてください。

話題の研究

京都府立大学オリジナル・純米吟醸酒「なからぎ」をよろしくお祈いします

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 遺伝子工学研究室
増村 威宏 講師

平成27年1月10日(土)は、本学のオリジナル日本酒「なからぎ」が発売された記念日です。そして、本学は今年開学120周年を迎えます。巡り合わせかもしれません、「なからぎ」の発売に向けて120周年という歳月が後押ししてくれた様に思われます。

最近、大学名が入った製品が多数出回る時代になりました。近隣の大学でも、学生が稲作や醸造に関与したり、販売プランを立てたり、大学オリジナルのお酒も販売されています。しかし、本学の「なからぎ」は、お米の研究段階から始まっている点が違います。京都府立大学と黄桜酒造(現黄桜株式会社)は、10年以上前から「美味しい米で造ったお酒は美味しい」というテーマで共同研究を続けてきました。研究には卒業生も関わり、本学で博士の学位を取得されました。その研究により、お米の中のタンパク質が少なく、適度な吸水性を示す稲品種が酒造用に最適であるとの結論を得ました。この考えに基づき、京都府農林水産技術センター、

(独)農業・食品産業技術総合研究機構、伏見酒造組合などと協力し、京都の地で栽培しやすく、酒造りに適した品種を選抜したのが、新品種「京の輝き」です。平成26年1月に開催された「留学生との交流餅つき大会」で「京の輝き」で造った純米吟醸酒を試飲してもらったところ、若い人にも高評価を得ました。主催者の府大生協も販売に乗り気になり、府大オリジナル清酒を出そう!という動きが加速して行きました。5月からは、ACTRの研究の一環として、製品化へ向けた取り組みをスタートさせ、多くの皆さんの協力を頂きながら完成したのが「なからぎ」です。アンケートの結果第1位に選ばれた名称が「なからぎ」でした。ラベルのデザインには、京都の街と鴨川がイメージされています。まるでスッキリしたお酒ですので、食事と共にゆっくり味わって頂けると嬉しいです。皆様!「なからぎ」を末永くよろしくお祈いします。



国際交流

生命環境科学研究科とタクシン大学技術・地域開発学部との学術交流協定

2014年12月に、生命環境科学研究科とタイ王国のタクシン大学(Thaksin University)技術・地域開発学部との間に、学術交流協定が結ばれました。同大学は、タイ南部マレー半島のマレーシア国境に近い、ソクラー県とパタルン県にキャンパスを持つ大学です。1968年にソクラー県に教育専門学校として設立され、その後拡充を経て1996年に改組され、「タイ南部における高等教育の提供と地域開発」を目的にした大学になりました。タイの国立大学25校のうち、23番目に設立された新しい大学です。Thaksin はタイ語で南部・南の意味で、大学名称は英語ではThe University of the Southになります。パタルンキャンパスには、技術・地域開発学部、理学部、健康スポーツ科学部の3学部があり、全体で教員161人、職員150人、学生2790人の規模です(2012年)。

同大学との交流では、2014年1月に Samak Kaewsuksaeng氏(同大学技術・地域開発学部副学部長)が来日して、精華キャンパスでセミナーを行い、留学生交流イベント(下鴨での餅つき大会)に参加しました。また、2015年1月には同氏と他の1名の教員が来日し、京都植物

バイテク談話会例会(大学院の講義の一環になっています)で講演を行いました。本学からは、2014年8月に、タクシン大学が開催した第3回国際シンポジウム「日本とタイの持続的発展のための生物資源科学」に、3名の教員と1名の大学院生が招待され研究発表を行いました。シンポジウムの後、パタルンキャンパスと周辺の農村地域の見学を行いました。この地域の農業は、天然ゴムの生産[パラゴムの木の栽培と主幹に傷をつけて滴る乳液(ゴム)の採取]、と雨季に河川の氾濫で一帯が水浸しになる低湿地での水牛の放牧が印象的でした。タイ王国南部は、北部や中部とは違う農業生産が行われており、この地域に根ざした研究協力が期待されます。



タクシン大学で開催されたシンポジウム終了後の歓迎会での技術・地域開発学部学生によるアトラクション

ニューフェース



**生命環境科学研究科 応用生命科学専攻
講師 朴恩榮 (ぱく うんよん)**

〈主な研究領域〉食品化学・食品加工学
(研究室：5号館2階 内線5405)
これまでに、「食品の品質管理を目的とした基礎研究」、「食品中の機能性成分の研究」、「食

品成分の新規分析方法の確立についての研究」、「食品ペプチドの食品加工中における挙動の解明と食品加工への応用研究」について取り組んできました。これらの研究を今後も継続し深めていくと同時に、「日本・韓国・中国などアジアの伝統食品の官能特性や機能性の研究」も新たに行っていきたいと考えています。実験室内の基礎的な研究にとどまることなく、実際に人が摂取することを念頭に置き、味覚に優れ、健康の増進にも寄与できる食品を創出していくことを研究の目標として考えています。



**生命環境科学研究科 応用生命科学専攻
准教授 安田 啓介 (やすだ けいすけ)**

〈主な研究領域〉イオンビーム科学、放射線物理学
(研究室：1号館3階 内線5442)
加速器で加速されたイオンビームを用いて、材料内部の組成分析や深さ方向分析を

行うイオンビーム分析に関する研究を行っています。イオンビームは物質中での透過力が高いため、物質内部の元素組成や結晶状態等を非破壊で測定することができます。また、イオンと物質の相互作用はこれまでの研究でよく調べられており、これらを基礎データとして用いることによって精度の高い分析が可能となります。イオンビーム分析技術を用いて、従来の手法では測定が困難だった薄膜試料や生体試料中の軽元素分析等に取り組んでいきたいと考えています。



**生命環境科学研究科 環境科学専攻
准教授 長野 和雄 (ながの かずお)**

〈主な研究領域〉気候景観研究、体感温度指標の開発と検証、感覚表現語の意味分析、住宅設備機器の環境性能評価
(研究室：5号館2階 内線5427)

博多、松江、奈良と渡り歩いた後、ここ京都にて建築設備学を受け持つことになりました。設備というと全国各地でも同じと思われがちですが、立地する気候が変われば機器の必要性能はもちろん、居住者が求める快適条件も変わります。各地の気候・風土・文化に触れると、気づかされるものがたくさんあります。今度は京都です。これまでとはまた違った風土の個性に触れながら、新しい発見を学生とともに追いかけていきたいと思います。

各学部・研究科の取り組み

文学部

歴史学で地域貢献

—京丹後市大宮売神社の資料調査と展示解説—

歴史学科 横内 裕人 准教授

文学部歴史学科では、京丹後市教育委員会と連携し、ACTR「京丹後市内における学校・公民館・寺社などの地域史資料の調査・整理・保存に関する研究」(代表：小林啓治教授)を利用した地域貢献に取り組んでいます。

本年度は、その一環として、市内周枳に所在する大宮売神社の所蔵資料について歴史学科の教員・院生・学部生が調査・整理に携わり、展示施設のリニューアルと一般公開での展示解説を行いました。

式内社の由緒をもつ大宮売神社は、中世には丹後二宮として信仰を集め、江戸時代には宮津藩主から庇護を受けていたことから、古代から近世に至る文化財を伝えています。また境内から出土した弥生時代の土器や古墳時代の祭祀遺物を始め、旧大宮町の各地で出土した遺物が神社に預けられています。この度、文献史学・考古学を専門とする院生・



大宮売神社での展示解説の様子

学部生が陳列品の性格を詳細に調査し、盗難・被災・紫外線等の危険を鑑みて展示資料を絞り込み、

神社の由来や地域の歴史をわかりやすく市民に伝える展示を目指して、展示をリニューアルしました。

平成26年10月5日(日)には、京丹後市制10周年記念行事の一環として行われた文化財特別公開で、調査を担当した院生・学部生が展示解説を行いました。約80名の来場者を前に、神社の歴史や資料の解説を行い、調査・整理で得た知見をお話しました。また来場者の方から、文献には記されていない神社にまつわるお話を聞くこともでき、双方向での学び合いが実現しました。

自らの専門性を活かして地域の資料を実際に調査し、これを永く保存しつつ、市民に理解して貰うという、調査・保存・活用を実践しました。〈自分の手・足・頭を動かし足下の歴史を学び後世に伝えていく。〉一見、地味な取り組みではありますが、歴史学研究の一步を踏み出すことができたと思います。

公共政策学部

地域福祉の現在

社会福祉学科 朝田 佳尚 講師



敷地いっぱい廃棄物が積み重なり、家屋に入ることさえできないゴミ屋敷。都市部のアパートや孤立した農山漁村で高齢者がひっそりと亡くなる孤独死。育児の方法がわからず、貧困と日々の疲労が体に蓄積しきった若い親による児童虐待。近年の地域社会は様々な社会問題が発生する現場となっています。

地域福祉はこうした問題に対応するものと期待されています。以前の地域福祉は高齢・児童・障害などの各分野福祉の地域版とみなされたり、福祉施設の地域展開を指すものだと考えられたりすることもありました。しかし、現在ではそうした側面に加え、上記のような生活問題を抱えたあらゆる当事者を対象に、ボランティアや見守り活動など、支援が可能な人びとをつなげ、地域における一種の助け合いネットワークを構築するものという考え方が強くなっています。

こうしたネットワークを構築するにはどうすればいいのでしょうか。ひとつはコミュニティの力を活用する

ことです。自治会、商店組合、消防団など、地域社会には多様な相互扶助組織がすでにありますし、地域を回る配達業者や学生ボランティアとの間に新たな連帯を築く試みもあります。

ただし、それが難しいときもあります。その際に有効な人材だと考えられているのがCSW(コミュニティ・ソーシャル・ワーカー)です。小学校区あるいは中学校区を単位として福祉施設の職員などが、地域で生活問題を抱えた人びとを見守り、またその地域ごとに存在する多様な社会資源(人材、場所、物資、資金、情報)とつなげるのです。

もちろん、CSWの介入はコミュニティの力を前提としたものです。もし専門家が独力でネットワークを構築したとしても、その場限りですぐに解体してしまうために継続的な支援は困難です。また、別の人に同じ問題が発生するのを防げません。しかし、逆にCSWの活動が契機になり、コミュニティの活力が上がることもあります。そのため、理想的にはコミュニティの力と助け合いネットワークは相互に増強し合うものなのです。

いかにしてこの理想を実現するのか。現代の地域福祉の中心課題はこれです。各地の事例や研究成果を積み重ねながら、その妥当なバランスやモデルづくりの可能性を問い続けたいと思います。

生命環境科学研究科

土の力を知り地球環境の保全を目指す

応用生命科学専攻 中尾 淳 助教

「土壌とはまさに地球の皮膚-地質学と生物学が出会う場所だ。私たちはそれを少しずつはぎとっている-文字通り地球の皮をはいでいるのだ」(「土の文明史」より)。この言葉には、土壌のわかりにくさ、ひっそりと果たしている役割の重要性、人類が積み上げてきた未必の故意により存亡の危機にある実態が、絶妙に集約されています。土壌は単なる岩石・鉱物の集合体ではありません。地質由来の鉱物と生物由来の有機物が、1000年あるいはそれ以上の年月をかけて混ざり合って合成される多機能物質です。土壌機能が一度劣化すると再生は容易ではありません。例えば、藤原京や平安京への遷都の折、都の造営に必要なヒノキ材の主産地であった滋賀県田上山では、1000年以上経過した現在も多くの斜面が禿山状態にあります。これは、過剰伐採で裸地化した表土において、土壌粒子をつなぐ“接着剤”の役割を果たしていた有機物が微生物によって徐々に分解され、結合が緩くなった表土が風雨によって侵食されたためです。土壌

劣化は何故かように見過ごされてしまうのでしょうか？残念なことに、土壌機能の変化は見た目ではわかりにくいのです。そこで私は様々な分析技術を用いて土壌機能を理解し、その理解を地球環境の保全に役立てることを目指しています。

現在は、主に「土壌の放射性セシウムの固定機能の解明」というテーマに取り組んでいます。福島原発事故以来、放射性セシウムによる環境汚染に高い関心が寄せられています。放射性セシウムは、土壌に含まれる鉱物の一種、雲母の構造中に閉じ込められてしまうため作物には吸収されにくいことが知られていましたが、私たちの研究により、雲母がセシウムを閉じ込める力は土壌ごとに大きく異なることが徐々に分かってきました。その違いが生まれる原因を解明し、その理解を作物による放射性セシウム吸収リスクの低減化に役立てることを目標に、さらなる研究を進めております。



生命環境科学研究科

農村ビジネスを創る人たちに魅せられて

応用生命科学専攻 農業経営学研究室 中村 貴子 講師

私の研究は、地産地消による農村のブランディングです。「地産地消」とは地域の物を地域で消費することで、主に、生産者が値決めをして販売する「産地直売所」や地域の農産物を使った料理などを提供する「農村レストラン」、学校給食における地元産食材の活用などの事業によって進められます。それらの成立条件に加え、リーダー層の人物、組織を対象に主体者の意識と行動を明らかにします。環境によって人は作られるといいますが、生い立ち、経験を明らかにすることにより、どのような人物に素質があるのか、またリーダー層の人材育成プログラムへの提案につなげていきます。

農業界では高度経済成長期頃から、兼業農家が増えました。今、農村のビジネスを支えている男性のリーダー層は、この兼業時に培った能力やネットワークを活かしています。一方、女性のリーダー層は、その生い立ちに起源があると思われ、他人を非難せず、何歳になっても

好奇心を持ち、その熱意で周囲を巻き込む人物です。また、これらを実現するために気遣いができる人物です。そして他地域から嫁に来るよりは、地域内で嫁いだという傾向があるようです。

都市部の人は退職後、孤独になりがちと聞きますが、農村コミュニティでは、暇を持って余している時間はありません。退職後は地域のコミュニティ維持のため、各々が持つ能力を発揮しなければなりません。とりわけ、中山間地と呼ばれる山中の農村では、過疎化が過度に進行し、コミュニティの危機的状況にあります。こうした地域では、知名度を高める「地域ブランド」を作ろうと70から80代の方が元気に現役で頑張っています。

こんなことを研究しつつ、最近では、農村の地域ブランド化をしたい地域で、商品や役務づくりへのアドバイスをするこも増えてきました。これからも、実践型研究者として頑張りたいと思っています。



サル対策電気柵設置

受賞情報

生命環境科学研究科 木戸 康博教授
「一般社団法人全国栄養士養成施設協会理事長顕彰」受賞

応用生命科学専攻の木戸康博教授が、栄養士・管理栄養士養成に多大な貢献をなすとともに、健康・栄養等に関する有益な研究、考察等を行い、教育に顕著な功績があったと認められ、「一般社団法人全国栄養士養成施設協会理事長顕彰」を受賞しました。

受賞内容

一般社団法人全国栄養士養成施設協会理事長顕彰(栄養士・管理栄養士養成施設教員顕彰)

生命環境科学研究科 大谷 貴美子教授
京都市「和食-京の食文化-特別表彰」受賞

応用生命科学専攻の大谷貴美子教授が、和食の原点である京の食文化を織り成す心、知恵、味の継承に大きく貢献した者の功績をたたえて、京都市が表彰する「和食-京の食文化-特別表彰」を受賞しました。

生命環境科学研究科 新川 友梨さん
第 87 回日本生化学会大会「若手優秀発表賞」受賞

応用生命科学専攻博士前期課程2回生の新川友梨さんが、第87回日本生化学会大会「若手優秀発表賞」を受賞しました。

受賞題目

「リボソームに再構成したシロイヌナズナ由来Mgイオン輸送タンパク質AtMRS2-10のMgイオン輸送はA1イオンによって阻害される」

生命環境科学研究科 宇田 美沙紀さん
日本生物高分子学会 2014 年度大会「優秀発表賞」受賞

応用生命科学専攻博士前期課程2回生の宇田美沙紀さんが、日本生物高分子学会2014年度大会「優秀発表賞」を受賞しました。

受賞題目

「シロイヌナズナ由来タンパク質AtMRS2-10の機能へのAl³⁺効果とGMN motifの重要性」

生命環境科学研究科 深田 史美さん
第3回日韓植物病理学合同シンポジウム「優秀ポスター発表賞」受賞

応用生命科学専攻博士後期課程1回生の深田史美さんが、第3回日韓植物病理学合同シンポジウム「優秀ポスター発表賞」を受賞しました。

受賞題目

「Two-component GAP CoBub2/CoBfa1 plays critical roles in G1/S progression via CoTem1 to establish plant infection in *Colletotrichum orbiculare*」

文学部 向井 佑介講師
一般財団法人橋本循記念会「第 24 回蘆北賞奨励賞」受賞
 歴史学科の向井佑介講師が、一般財団法人橋本循記念会による「第24回蘆北賞奨励賞」を受賞しました。

受賞論文

「仏塔の中国的変容」(『東方学報』京都第88冊、2013年)

文学研究科 島本 多敬さん
「第 14 回人文地理学会学会賞(論文部門)」受賞

史学専攻博士前期課程2回生の島本多敬さんが、「第14回人文地理学会

学会賞(論文部門)」を受賞しました。

受賞論文

「近世刊行大坂図の展開と小型図の位置づけ」(『人文地理』65巻5号、377-396頁)

生命環境科学研究科 桑波田 雅士准教授
「2014 年度日本アミノ酸学会科学・技術賞」受賞

応用生命科学専攻の桑波田雅士准教授が、「2014年度日本アミノ酸学会科学・技術賞」を受賞しました。

受賞題目

「アミノ酸・ペプチドの病態栄養管理への応用に関する研究」

生命環境科学研究科 大谷 貴美子教授
「一般社団法人滋賀県発明協会会長賞」受賞

応用生命科学専攻の大谷貴美子教授が、発泡飲料容器(特許第3584976号)の発明の功績により、一般社団法人滋賀県発明協会会長賞を受賞しました。

生命環境科学研究科 原田 賢さん
第 14 回糸状菌分子生物学コンファレンス
「優秀ポスター発表賞」受賞


応用生命科学専攻博士後期課程2回生の原田賢さんが、第14回糸状菌分子生物学コンファレンスの「優秀ポスター発表賞」を受賞しました。

受賞題目

「ウリ類炭疽病菌における出芽酵母ストレス応用制御因子WHI2のホモログCoWHI2は宿主防御応用の誘導と準活物寄生性の制御に関与する」

生命環境科学研究科 平井 沙也花さん
第 53 回日本栄養・食糧学会近畿支部「若手研究者奨励賞」受賞

応用生命科学専攻博士前期課程2回生の平井沙也花さんが、第53回日本栄養・食糧学会近畿支部「若手研究者奨励賞」を受賞しました。


受賞題目

「紅蔘エキスによるアトピー性皮膚炎抑制効果と好塩基球への影響」

生命環境科学研究科 佐藤 茂教授
The 3rd Asia Pacific Symposium on Postharvest Research, Education and Extension (APS2014) (第3回収穫後の研究・教育・普及のためのアジア太平洋シンポジウム)「Outstanding Postharvest Horticulture Researcher (収穫後園芸学優秀研究者賞)」受賞

応用生命科学専攻の佐藤茂教授が、長年に渡る収穫後園芸学研究への貢献及び業績に対して、The 3rd Asia Pacific Symposium on Postharvest Research, Education and Extension(APS2014) (第3回収穫後の研究・教育・普及のためのアジア太平洋シンポジウム)「Outstanding Postharvest Horticulture Researcher (収穫後園芸学優秀研究者賞)」を受賞しました。

公共政策学部 川瀬 光義教授
「第 42 回伊波普猷賞」受賞

公共政策学科の川瀬光義教授が、沖縄タイムス社による「第42回伊波普猷賞」を受賞しました。

受賞著書

「基地維持政策と財政」(2013.9) 日本経済評論社

退職教員からのメッセージ

Tomorrow is another day 文学部欧米言語文化学科 大谷 直輝

高校生の頃、ハリウッド映画が好きでした。当時見た映画に、Tomorrow is another day. というセリフがありました。一般的には、「明日は明日の風が吹く」と訳されますが、高校生の僕は「明日はきっといい日だ」と訳しました。拙い英訳なので、府大生がそんな訳を書いたら、きっと減点すると思います。でも、当時の僕はその訳を気に入りました。

高2の冬、ひょんなことから留学することになりました。英語が苦手で、知り合いがいない中でスタートした留学生活はしんどいことも多々ありました。落ち込んだときは、Tomorrow

is another day. と心の中で呟きながら、今日がどんなに辛くても、また明日から頑張ろうと思いました。時は流れ、今では英語を生業としています。英語学を研究したり、英語を教えたり、あの時とはずいぶん変わった生活をしています。でも、気持ちは昔も今も変わらず、いつも前向きでいたいと思います。

2年という短い期間でしたが、府大の教職員の皆様や学生の皆さんには大変お世話になりました。鴨川のほとりの四季の美しい府大での生活は毎日が楽しく、充実していました。皆様とともに府大で教育と研究に打ち込んだ二年間は私にとって宝物です。この経験を活かし、頑張っていきたいと思います。

また、お会いしましょう！



退職にあたってのメッセージ 公共政策学部公共政策学科 大島 和夫

私は2008年4月に公共政策学部へ赴任し、2015年3月で退職します。公共政策学部および研究科の発足と同時にきました。7年間、熱心な学生・院生の方達と一緒に勉強することがで

きて、とても幸せでした。小さな大学だけに、みなさんとは親密なおつきあいをすることができ、今後も親しくしていただけるものと期待しています。研究面ではやり残したことが山ほどありますが、これからは在野の人間として、こつこつと勉強を重ねていきたいと思っています。再び、府大のみなさんのお力になれればと願いつつ、野山を歩き続けたいと考えています。

退職にあたってのメッセージ 公共政策学部公共政策学科 青山 公三

私は6年半しか府大におりませんでしたが、大変濃密な6年半を過ごさせて頂くことができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。府大には深い愛着を持っています。そのような愛着が生まれた背景には、学生と教員との関係、教員同士の関係の中に、多分他大学では得られない素晴らしい人間関係があったからだと思っています。色々な場面での学生さんの反応は本当に楽しいものでした。府大の元学長の広原先生に赴任直後にお会いする機会を得、その際に「学生さんの反応は自分を映す鏡だよ」と仰っ

て頂きました。その意味で自分も大いに楽しめたということかもしれません。また府大では、大学と地域との連携や、学内シンクタンク「京都政策研究センター」の取り組みなど、新たなチャレンジの機会を頂いたことも大きかったと思います。

私が在任中に送り出した青山ゼミの卒業生、院生は39名に上ります。毎年彼らが同窓会を開催してくれ、大きく成長していく姿が見られるのは、指導教員の特権かもしれません。これも楽しいことですが、私もまだまだ色々なことに挑戦していく意欲を持って次のステップに向かいたいと思います。有難うございました。



いのりひとつ 公共政策学部福祉社会学科 津崎 哲雄

「真理を愛そうとも求めようともせず、虚偽こそが善と信じられる時代に我々は生きている」と50年代末に亡命先パリでN.ベルジャーエフ(露国哲学者)は遺稿に記しています。現在の日本はこの言葉そのものです。東北被災者やフクシマの民を放置し、社会的養護児童を人並みに扱わず、世界三位の経済大国で母子家庭半数が貧困なことや子ども貧困率が先進国中最悪域(16.3%)にあり、面積0.6%の沖縄に米軍基地75%を集め、民の暮らしと命を脅かし続けています。この国では、傷ついた者が癒されるどころかさらに傷つけられ、被災者は放置され、乳幼児は虐げられ、寡婦は見捨てら

れ、「命が金にかえられる」(鎌田慧) 軍事基地・原発(経済優先)依存が続いています。

このような国のあり方が生じた原点は、最高指導者戦争責任免責(H.ピックス)と憲法9条解釈への詭弁に求められるでしょう。この無責任と虚偽は貪欲・自己中心と手を組む、この国の社会・政治経済・教育・暮らしを下支えする通奏低音となっています。

府大で学ぶ皆さん、近春巣立つ皆さん、みなさんがこの通奏低音の呪縛から解放され、虚偽は悪として断固拒否、真理と善を愛し求める生き方を貫けますように！



退職教員からのメッセージ

京都府立大学での8年9ヶ月

生命環境科学研究科応用生命科学専攻 佐藤 茂

本学には8年9ヶ月在職し、この3月末で定年退職します。前任校では、教養部に16年8ヶ月、農学部で13年3ヶ月在職しました。

本学に赴任後は、研究設備や研究費にほとんど不満を感じることなく、快適に研究・教育ができたこと感謝しています。これ

は、研究成果を発表した論文として表れました。教養部時代に29報(うち筆頭著者として20)、農学部時代に35(7)報、そして本学赴任後に45(10)報を発表することができました。共同作業をしてくれる学生、学内の事務方々および研究室の職員のバックアップがあればこそ、成果をあげることができました。

在職期間中、本学からは本当に良い研究教育環境を与えていただきました。本当にありがとうございました。

社会をデザインする

生命環境科学研究科環境科学専攻 三橋 俊雄

「きょうと〜」烏丸線の車内放送を聞いて「ああ、今、あの京都にいるんだ」としみじみ感じた自分がついこの間のことのように思い出される。あれから18年、さまざまな出会いが私を育ててくれた。ご高齢の方々からは「京のしまつ」について、西陣織との出会いからは「文化の蘊奥」を学んだ。また、学内外のプロジェクトを通して障がい者の自立支援・高齢者の介護支援に向けた福祉機器のデザインを提案、一方、丹後半島の農山漁村における環境共生教育演習からは地域で醸成された「生活の知恵」「生活文化」の大切さを学生とともに体験させていただい

た。さらに、中国・台湾・アフリカなどの地を留学生たちと踏査し、その地ならではの生き方、発展のあり方などに触れ、文化の多様性や異文化相互理解の重要性などについても学ぶことができた。こうして地域で体験・感動し、発信・行動する活動を通して、今、私の関心は、3.11

を契機に、サービス依存型現代社会を見直し「自然と共生し自分の力で生きる=Subsistenceな生き方」の探求にある。これまで京都で実践してきた「社会をデザインする(Social Design)」姿勢を保ちつつ、退職後、「曲がり角」の向こうに新たな地平を見つけていこうと思う。



有り難うございました

生命環境科学研究科環境科学専攻 大越 誠

農学部林産工学科という学科に入学してから四十数年、木のことを勉強、研究してきました。その中で私が見たり、触ったりした木の数はそんなに多くはありませんが、世界には8,000種ほどの木があるとされています。寒帯から熱帯までそれぞれの気候に適応した樹木があり、それらの樹木は姿、形も異なり、それぞれ固有の特徴、性質を持っています。それらの個性をうまく利用して適材適所で種々の木製品が作られ、建物、家具、楽器、食器類など様々な用途に使われて、我々に種々の恩恵をもたらしています。

一方、大学は全国各地から学生が集まり、集団生活を送っています。その中で私のいる研究室に所属し、身近に接する学生の数はそれほど多くはありません。しかし、一人一人がそれぞれ個性を持っています。その個性をできるだけ生かして卒論、修論研究をどのように楽しく、興味を持ってやってもらうかが考えどころです。そうすれば、身が入り、良い成果も出るのではないかと考えています。反省点も多々ありますが、充実した大学生活を送らせて頂いたと思っています。関係の方々にお礼申し上げます。



ある年の卒業謝恩会にて

長年の間、学生の教育や研究などの発展にご尽力をいただき、本当にありがとうございました。

表紙の写真は、写真部の廣瀬亮太郎さん(農学生命科学科2回生)に提供いただきました。
ご協力ありがとうございました。

広報委員会広報誌編集部会